



図9 11トレンチ埴輪棺1・2（北から）



図10 11トレンチ埴輪棺3（東から）

から重ね置く。中央付近では長さ50cmほどの半裁した円筒埴輪片を外面上向きに2枚重ね置き、その隙間を埋めるように小さい埴輪片を重ね置く。北側では墓壇の長軸に突帯が平行するように埴輪片を置く。小口部分では内面を内側に向けた埴輪片を、小口を塞ぐように立てて置く。これらの埴輪片を覆い隠すように、上に長軸30cmほどの石を並べ置く。この集石部は1段目平坦面上に露出していた可能性も考えられる。

土師器皿集積遺構 トレンチ北西部の直径30cm、深さ10cmの掘り込みから、中世の土師器皿8点が4点ずつ重ね置かれた状態で出土した（図8）。第6次調査の際、隣接する15トレンチでも同様の土師器皿が集中して出土している。これらは近接した時期に廃棄もしくは埋納されたと考えられる。（橋本・大野）

（2）18トレンチ（拡張区）

南側くびれ部の3段目斜面と2段目平坦面の状況を明らかにするため、第6次調査で設定した18トレンチの南半を西側に拡張した。拡張区は南北約4.3m、東西約2.0mをはかる（図11）。

3段目斜面 葺石が良好に遺存しており、後円部の基底石と前方部の基底石が接する状況を明瞭に確認できた。基底石には長軸45cmほどの石を用い、おおむね長軸が墳丘ラインに沿うように並べている。後円部では長軸25～40cmを主体とする石を葺き、その隙間にやや小さめの石を詰めているのに対し、前方部では長軸15～25cmを主体とする石を使用している。後円部と前方部の接続部では、後円部の葺石を覆うように前方部の葺石を葺いている状況を確認できることから、前者を葺いた後に後者を葺いたと考えられる。また、前方部の接続部付近では、後円部と同様に長軸25～30cmほどの石を葺いた区画が認められるが、その性格は明らかでない。

2段目平坦面 標高28.1m前後である。トレンチの範囲内では埴輪列は認められなかった。

出土遺物 埴輪と中近世の陶磁器が出土した。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪がある。原位置を保って出土したものはなく、いずれも墳頂から転落したものと考えられる。前方部3段目斜面上に堆積した墳丘流土中から朝顔形埴輪がまとまって出土したほかは、ほとんどが小片である。（橋本・北口）



図11 18トレンチ拡張区全景（南から）